

8 月第 4 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 8 月 27 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節第 14 主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「病人の手を取り」

■聖 書：ルカによる福音書 14 章 1～6 節（新約 p136）

■讃美歌：12「とうときわが神よ、くらぶるものなき主よ、」

503「ひかりにいます主、」

昨日の土曜日（8月26日）、新聞の別刷りを見ておりました。そのなかの悩み事相談の欄で、「生きる意味を教えてください」という50代の女性の相談に対して、政治学者の姜尚中氏が答えている文章の中に目を止めました。「大切なことは私たちが人生の『意味』を問うというより、人生からその『意味』を問われているということです。」そこまで読んで、これはあの方の文章からの紹介だなと気づきました。段をまたぐ形で文章は続いていました。「そしてその都度、それに応えていくところに生きる『意味』が現れてくるのです。このことを私はナチスの強制収容所から生還し、『夜と霧』を著したビクトール・フランクルから学びました。」短い文章でしたが、私自身もこの言葉によって生き方を変えられた経験をしたことを思い出しました。私の場合、フランクルの『夜と霧』という書物には若いころに出会っていました。しかし、大きな影響を受けたのは、2010年8月に世界遺産である「アウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所」を訪ねてからのことです。改めてもう一度フランクルの作品をいくつか読み直しました。そのような中で、次の年の2011年3月11日（金）に、当時私たちが遭わされていた東北の地で東日本大震災が起きました。当日、私は用事のために泊りがけで上京していて、その大震災にその場で遭遇しなかったこともあり、被災した方々に負い目を感じるような思いに駆られて、私の人生の中で大きな転換が起こった時期でした。フランクルの言葉になぞらえて表現するならば、「私が主なる神様の存在の意味を問うというより、主なる神様という存在から私の存在の意味を問われている」と考えるようになったと言えるでしょう。

そのようなことを考えながら、本日の聖書箇所であるルカによる福音書14章1節から6節までをもう一度読み直しました。本日の箇所の「安息日に水腫の人をいやす」という出来事も、先週読みました13章10節から17節までの「安息日に、腰の曲がった婦人をいやす」という出来事も、主イエスが巻き込まれた安息日論争に関わるものです。他の福音書には記載されていないルカによる福音書だけのオリジナルのものです。本来、安息日は非ユダヤ教徒である異邦人には関係のない話のはずです。にもかかわらず、異邦人であったと考えられるルカによる福音書の著者であるルカは、他の福音書では取り上

げていない事例を挙げて、安息日の問題を積極的に記しているのです。それは、これらの出来事を通して、キリスト者が信じるイエス・キリストとはどのようなお方なのかを異邦人にこそ知ってほしいと願ったからに違いありません。それは、イスラエルという狭いところで生まれたキリスト教が、やがて広い世界へと伝わっていくということにも関わる大切な事柄であるということです。

1節に、「安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。」とあります。主イエスがファリサイ派の人に招かれてその家で食事をするという場面を、ルカによる福音書は何度も描いており、本日の箇所でも三度目です。この14章においては、この食事の席での話は24節まで続いています。そして、この後の15節以下では、神様による救いに与かることを、盛大な宴会に招かれることに譬えておられます。ですから、宴会に連なり食事を共にすることを、主イエスは基本的に良いこと、恵みに満ちたことと考えておられると言えるでしょう。

しかし、この日のこの食事会は、「人々はイエスの様子をうかがっていた」と記されているように、人々が主イエスのことを疑いの目で見つめ、監視していたなかで行われました。ファリサイ派の家に最初に招かれた7章36節以下においては、そこに入って来た罪深い女に主イエスが「あなたの罪は赦された」と宣言なさったのを聞いて、招かれていた人々が「罪まで赦すこの人はいったい何者だろう」と考え始めたことが語られています。二度目の11章37節以下においては、その食事の席で主イエスがファリサイ派の人々の偽善を厳しく批判なさったために、その後、律法学者やファリサイ派の人々が主イエスに対して激しい敵意を抱き、言葉尻を捕らえようとねらうようになったと語られています。そのように、ファリサイ派の人の家での食事を重ねるごとに、主イエスと彼らの間は次第に険悪になってきていたのです。私は、このような出来事の経過を読むときに、コロナ禍の前には多くの教会で交わりを深めるために愛餐会が開かれていたことを思い出します。確かに、食事をとりながらの会話は親しさを増すことも多かったと思います。しかし、食事は日常生活の延長でもあるという面から、多くのトラブルが生じてしまったということもよく見聞きするところです。

ところで、主イエスと彼らとの対立の原因の一つは、安息日についての解釈をめぐったことでした。ユダヤの律法では、十戒に「安息日を心に留め、これを聖別せよ」と定められていました。週の七日目の土曜日は安息日であり、その日には何の労働もしてはならなかったのです。もともとは、人間の業をやめることによって、神様による天地創造のみ業を喜び祝いその恵みを感謝し、自分もまた自分の下で働いている者たちも安息に与ることが目的でした。ところが次第に、安息日にしてはいけない「労働」に当たることは何か、についての細かい規定を守ることをばかりを考えるようになっていました。

そのために、安息日の本来の意味に即して行動しておられた主イエスと彼らとの間に対立が生じたのです。先週読みました13章15節以下には、主イエスは、「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか」とお怒りになっています。それに続いての本日の箇所も安息日の出来事です。2節に「イエスの前に水腫を患っている人がいた。」とあります。体に水が溜まりむくんでしまう病気ですから、一見してはっきりと病気と分かる状態の人でした。それで人々は、主イエスが安息日にこの人を癒すかどうかを、席に着く前から注目して見ていたのです。

主イエスは彼らに、「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか」と、問いかけました。「彼らは黙っていた」と4節にあります。そのような敵意に満ちた沈黙の中で、主イエスはこの病人の手を取り、癒してお帰しになったのです。そして主イエスは「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」と重ねて問いかけました。自分の息子が井戸に落ちた時に、「安息日が終わるまで待つて」などと言う親はいないはずで、またそのように命を救うことは律法においても認められているのです。病気で苦しんでいる人を癒すことはそれと同じではないか、それなのに、病気を癒すことは労働だから安息日にしてはならない、などというのは、安息日の本来の意味や目的を全く理解していないことだと厳しく責められたのです。13章においても本日の箇所においても、誰も反論することはできませんでした。ここで、ルカによる福音書の著者がなぜ、同じような話を重ねて記しているのかを考えてみたいと思います。腰の曲がった婦人を癒したのは、「婦人よ、病気は治った」という主イエスの言葉です。そして、水腫の人を癒したのは「病人の手を取り」という主イエスの行為です。私自身のことになりますが、昨年手術をし、現在はその経過観察と生活習慣病の管理で定期的に病院にかかっています。そのような中で、パソコンの画面だけを見つめ目の前にいる患者を診ない診察が現実に行われていることを体験しました。けれども、どんなに多忙な中であっても手術後の様子を見に来てくださって、ご自身で処置をしてくださるドクターにも出会い、また混雑している中でも、必ず聴診器を当てアイコンタクトを取ってくださる診察もあることを、身をもって知りました。そのことを思いながら、安息日に主イエスが、その時に最も適した言葉をかけて婦人を束縛から解いて癒されたことと、手を取って病人を癒されたことの意味を深く教えられました。そして、私たち一人一人には、いずれも必要不可欠な主イエスの御言葉と御業であることを実感したのです。そのような主イエスの恵みが、安息日を通して、私たち自身にも私たちの隣人にもさらに注がれるようにと、祈り続けていきたいと思っています。